

「“天国への引っ越し”手伝います」を見て

高齢者の孤独死については、先に「『死のクオリティー』の言葉の重み（「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（IV）P、2007.10.01.：参照）」で触れたことがある。

この問題の別切り口からの番組「“天国への引っ越し”手伝います ～遺品整理会社～」を見た。

都会の片隅で孤独死した人々の遺品を回収し、遺族に返したり供養して処分したりする「遺品整理専門会社」を取り上げたものであった。

この会社には遺族や大家から年間2千件を越える依頼があるという。

「係わりたくないから」、また「遺品を見るのが辛いから」等々の理由で遺品の受け取りを拒否する家族も…。

「遺品は持ち主の人生を語りかけ、その行方は人間関係の現実を映し出し、現代の孤独と家族の今を語る」という。

確かに、その人の死に直面した周り人々の受け止め方が、その人の人生そのものの「生」の証を物語るのであろうと思う。

自分は35年間の勤務の中で、難病児・者や重症児・者の多くの死に接してきた。

生活の充実という療育面で係わり合う専門職チームとして、死は正に我々にその人の死の受け止め方を問われるものであった。

退職したり、また、配置替えで担当していなくても、その子を可愛がり親しかった人には臨終間近には連絡した。

また、一般的に病院は患者の告別式に出席する責務はないが、家庭から離れての長期入院だけに、その人なりの日常の個性ある「生きる」を支援していたのは我々の部署であり、自宅での「告別式に出席したい」というスタッフには出席することを了解し、長期の入院生活中の様子を知るスタッフだけに、時に弔辞を家族から依頼されたことも多かったよう。

それが正にその人の「生きていた証」の人間関係というものであろう。

一方、配置替えで担当していなくとも臨終間近に一目会っておきたいと思うのは人として自然な感情であるが、医療職からは「他職場の人間が、何しに来た」という冷たい目で入室を拒否され、涙ぐみながら訴えて来るスタッフの姿も目にしたことがある。

後で医療職にこのことを話し、「これからは、配慮する」と確約を得たが…。

さて、介護保険で「ターミナルケア加算」がつくようになり、高齢者関係の各施設等の関心が高いようであるが、その人の「死のクオリティー」の具体的援助のあり方に真摯に取り組んでもらいたいと、番組を観て改めて思った。